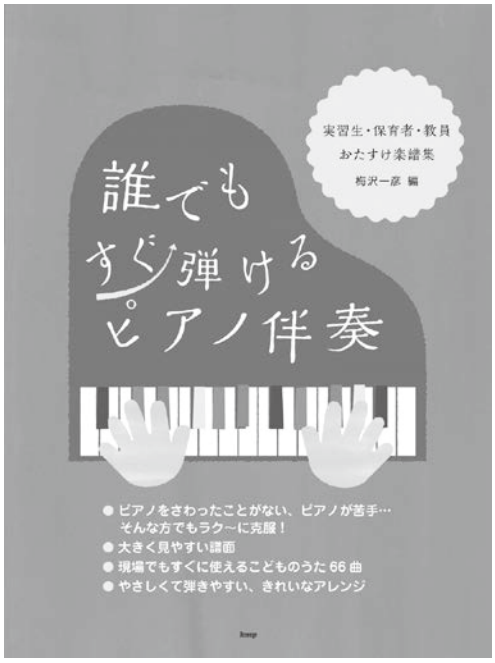
幼児への音楽表現の実践

―『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏』を刊行して―

Musical Expression Practice for Young Children:
On Publishing *Daredemo Sugu Hikeru Piano Bansō* (Easy Piano Accompaniment for All)

梅沢　一彦
Kazuhiko Umezawa

1. はじめに



コロナ禍の中、演奏に関わる音楽人は他の職業と共に大きな影響を受けている。全ての演奏会が中止や延期になり、少々改善されているとはいえ、まだまだ以前のような演奏活動が自由にできることは先になりそうである。こうした状況の中、以前に出版社からの「幼児の音楽表現に関わる楽譜の世の中に提供したい」という依頼により、本書（楽譜）を刊行することになった。

「音楽に関わるものは音で表現するもので、ことばで説明するものではない」との先達のことばを思い出しながらの作業であったが、著者が幼稚園等での訪問演奏、園歌の創作、歌の楽譜制作（伴奏譜中心）、講演などの経験や活動の中から得た事を映した「歌の伴奏譜」の制作について報告したい。

幼稚園教諭、保育士を目指す学生の中にはピアノに触れたことがない、楽譜が読めない学生がいる。しかし、幼稚園教諭、保育士になるにあたりピアノは必須事項である。そこで多くの学生に携わった経験を基に、幼稚園教諭、保育士を目指すピアノ初心者にはどのような伴奏譜が適しているのかも考察し、2冊の楽譜集を刊行した。本誌を利用する方々の今後の活動に、いかばかりでも役に立つことを目指している。

2. 楽譜の作成と変遷

『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏』（ケイ・エム・ピー、2015年）は、次の事項について検討しながら、約2年の作製時期を経て刊行された。

(1) 編曲者の決定
(2) 掲載する作品の決定
(3) 全体を何曲にするかの選定
(4) 教本としての内容の決定

玉川大学　教育学部教育学科

(5) 全体のレベルについての決定

そして6番目に、第2版の出版にあたっての改訂のイメージを共有した。

(1) 編曲者の決定

なるべく広い分野で活動する方々を候補とした。結果として、大学の教員、演奏活動の仲間、現役の幼稚園･小学校の教員､子育て経験のある方など5人の先生方と執筆協力者2名に協力をお願いすることになった。

後述する「(2) 掲載する作品の決定」にも提示するが、それぞれの編曲者たちには「音符を少なく、しかも良い音である」ことを目標に作業にあたることを目指した「プロの眼」をもち、ピアニストというだけでなく、深く乳幼児の現場がどのようであるかを識っている人に関わってもらわねばならなかった。何よりも「良い曲」が歌い継がれて欲しいとの思いも楽譜の作成にあたって編曲者に徹底した。「耳で感じる感覚的な音楽の必然性と作譜の工夫」について、実際に、それぞれの現場で実践していることを編曲者たちの共通項とした。

(2) 掲載する作品の決定

①選曲と編曲にあたって

初めに、各先生方に自由に曲を挙げてもらった。基準を「幼児に適切と思われる曲」として、100曲以上の曲が集まった。それらは、得意な曲、実際に教育現場で使っている曲などに加え、新しい曲との出会いの可能性も含んでいた。結果として、1冊目で66曲を掲載し、1年半後続編を刊行し、3年がかりで132曲を掲載したことになった。

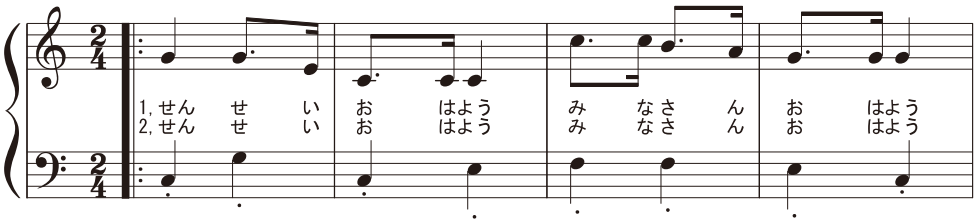
集まった曲はどれもが現在幼稚園などで広く歌われている曲であった。各人が自由に選曲したため、重複する曲もあった。また、教育現場でよく使われている曲でも、「ピアノが苦手な人も弾けるような伴奏で提示する」という約束事の照らし合わせをしながら選曲を調整した。実際それぞれの編曲者がどのような編曲をするかは、この時点では定かではなかったが、どのような約束で出版社と作業を進めたのか一部を示す。①歌唱の伴奏に長けている方、②ご自分のお子さまが丁度幼稚園に行っていた方、③小学校の現役の先生、④大学で乳幼児教育に関わっている方、による複数の視点から一つの編曲を検討することにした。

さらに、本学の授業で関わった学生の作品も、筆者が、初心者でも弾ける簡単さだけでなく、綺麗な音を重視した編曲を加え、「玉川大学教育学部学生編」ということで掲出することにした。これは、授業等で学生と作り上げてきた作品を残したかったとの思いが強い。

②選曲の基準

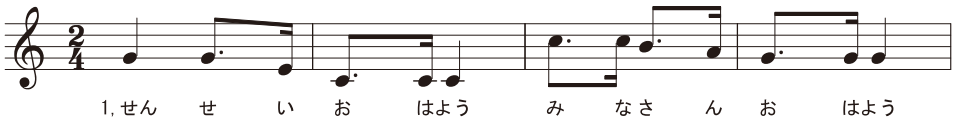
楽譜1

あさのうた（おはよう）



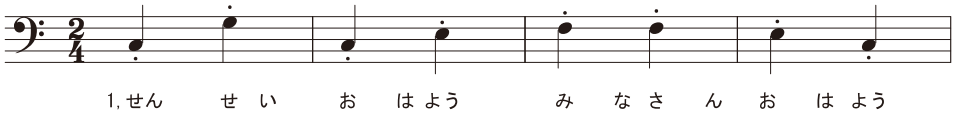
楽譜2

「あさのうた（おはよう）」右手



楽譜3

「あさのうた（おはよう）」左手



先ず、初心者に音源を探ってよく聞いてもらうことを示した。『目と耳でおぼえるピアノ伴奏』（CD、DVD拙編集2015年、キングレコード）に掲載の曲は、①全体を聞く②右手の練習③左手の練習④両手の順番で、それぞれを「ゆっくりと」、それから次に「イン・テンポにして」練習できるようになっている。よく聞くということは音楽の基本で、良い音楽を作り出す第一歩となる。どんな場合も音楽は良いものを聞く、という基本に習ってそのCDには示した。大学の授業内で、学生には「自分と音楽」について話してもらう機会を設けているが、8割以上の学生が「音楽を聴いて」、というテーマで話をまとめる。「聴く」ということが、実際の生活の中での「音楽」になっていることを表すと考えられる。

次に、練習初めは右手だけでメロディーを弾く。初めは「ゆっくり」。少しずつテンポをあげて、「イン・テンポ」となるまで。伴奏に合わせて皆で歌うのだから、事前の合図や自身も一緒に歌えるようになるまで練習する。練習時の確認事項としては、「イン・テンポ」で間違わず弾けたのか。続けて、左手も同じように、テンポよく弾けるまで練習をする。

楽譜には右手に3つ、左手には4つの確認事項がある。右手の確認事項として①鍵盤を探したり、つっかからずに弾けるようになったか、②イン・テンポで弾けるようになったか、③弾き歌いができるようになったか、の3つ、左手にはさらに、右手のメロディーを思い浮かべたり、歌いながら弾けるようになったか、を確認することが欠かせない。右手のメロディーを歌う時、左手のメロディーを想像しなければ、なかなか一緒に歌うことはできない。

また、演奏中の「つっかかり」や「つまずき」のことも考える必要がある。初心者は特に、最初から両手で弾くことを覚えようとする。練習していくうちにつっかかる。つっかかりを数度繰り返しているうちに、それが正しいものとして認識してしまう問題が生じる。したがって、初めは「ゆっくり」そして「イン・テンポ」で弾く。これが大事だと考える。全くキーボードに触れたことない者でも、楽譜1～3に示したように、楽譜1の両手で示したものより、楽譜2.3の片手ずつ示した方が練習しやすいと、誰もが思うだろう。初心者にとって、楽譜から情報が少ない方が安易であることは明白である。楽譜1をすぐ弾くよりも、楽譜2を弾き、楽譜3を弾き、それぞれを「イン・テンポ」で弾けるようになってから、楽譜1を弾くということである。つまり一度に鍵盤を弾く数（音）が少ない、時間に対して音が少ない方が簡単と言える。選者のピアニストにも、片手からの練習方法は得心してもらえた。初心者には楽譜からの受ける難易度の印象は否めないのである。

次に、オリジナルの楽譜と本巻に掲載曲の右手と左手の音の数を比べてみた（表1）。なお、曲の長さが違うのでここでは歌い出しの4小節を比べる。

表1　オリジナル楽譜と本巻に掲載曲の右手と左手の音の数

曲	手	本巻	オリジナル
ぞうさん	右手	15	15
	左手	8	9
せんせいとおともだち	右手	18	55
	左手	12	11
あさのうた（おはよう）	右手	13	13
	左手	8	12
とんぼのめがね	右手	16	21
	左手	5	7
あめふりくまのこ	右手	15	15
	左手	10	10

ここではすべてを披露できないが、特徴ある曲を選び表にした。初心者にとって、鍵盤を弾く数が少ないということは簡単に思えるし、また初見した時に簡単に見えるものである。掲載するにあたり、この点についても、編曲者へ指示をした。もっとも、必ずしも音符の数が少ない方が簡単とは言えないこともある。ピアニストにとって、目の前にある楽譜の再現は、どんなものであっても、良い音を出すために努力を要しているからである。編曲にあたっては、この点も併せて考えながら進めた。

また、実際に演奏するにあたっての配慮として、片手ずつ練習しながら、演奏を習得していくには、次のようなことが現場で考えられるからだ。通常のピアノ演奏と違い、子どもたちを前にした教室や保育室では、度々片手で弾かざるを得ない場面が生じる。ピアノを含む鍵盤楽器が壁側に面して設置されている場合、子どもたちは、奏者の後ろ側や側面にいることが考えられる。また、子どもと一緒に「音楽」をする場合や「遊戯」を伴う場面では、片手での指導はやむを得ないのである。片手で弾くあるいは、立ったままでの演奏を強いられる（これは子どもとの場合は、よくあり得る）などの場面を想定した、片手での演奏練習、特に左手だけの練習は必須となる。

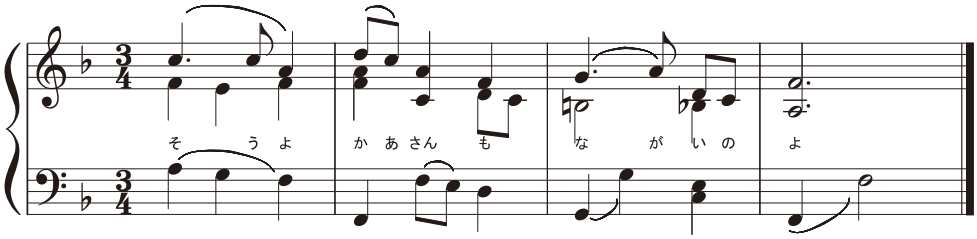
教育現場で扱う曲において、音楽はリズム、メロディー、ハーモニーの大きく3つの要素から成り立っている。右手はメロディー旋律である。リズムとハーモニーを示すのが左手となる。どちらが大切かの話ではないが、実際に弾いてみると、つっかかったとしても左手がしっかりしていて、テンポが合えば、曲は先に進める。したがって「右手はメロディー、左手で伴奏」を徹底した楽譜作りにすることにした。メロディーは時間を横に、音を上下させながら進む。音楽は、時間を共有することによって生まれる。リズムは強弱を一定の時間に示す。ハーモニーはある一定の時間それらを包括する。整理すると、「右手ではメロディーを、左手で他の二つ」を示すことになる。極端な話ではあるが、左手で十分なテンポを示すことができれば、歌の伴奏としてはほぼ完成しているとも言えなくない。何故なら、右手ではメロディー、つまり歌唱する側がそれを担当するからである。

なお、前述した通り、「良い曲」が歌い継がれて欲しいとの思いと「耳で感じる感覚的な音楽の必然性と作譜の工夫」を、理論だけでなく、それぞれの現場で歌の伴奏を多く担当している演奏者と編曲者たちが共有し、選曲にあたった。

次の楽譜を見ていただきたい。

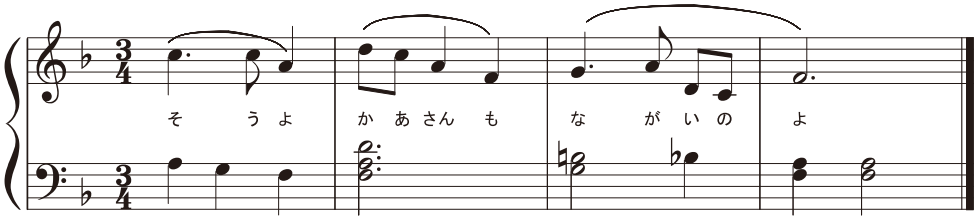
楽譜4

ぞうさん　オリジナル



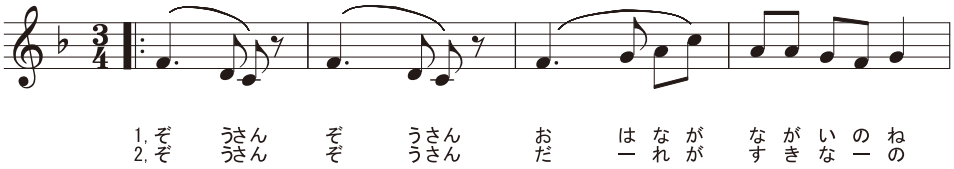
楽譜5

ぞうさん　編曲



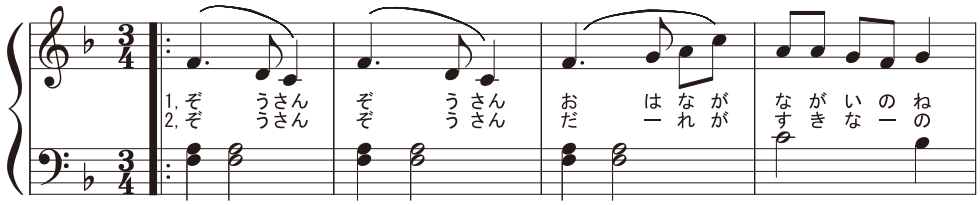
楽譜6

ぞうさん



楽譜7

ぞうさん



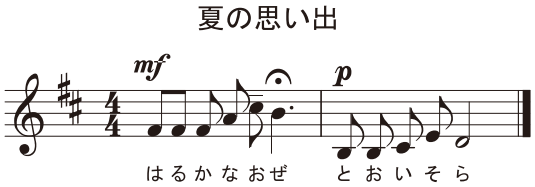
この楽譜4はオリジナル、楽譜5は編曲の楽譜である。誰でも知っているこの曲は多くの幼稚園で歌われている。この2つの楽譜を見ると、明らかに楽譜7の方が簡単に見える。どんな楽譜も、まずは初心者が向き合えるように工夫を凝らした。簡単であるかどうかは、一つには小節数と音符の関係、謂わば「時間と音」の関係により、一定の時間に音が少ない方が一般的に簡単と言える。つまり、一つの時間にどれだけの音符を再現しなくてはならないかが難度を決める。実際創作した團伊玖磨氏によれば、「このくらいは弾ける人が指導に当たって欲しい」という希望をもっていたということを、40年近く前の講演の際に伺ったことがある。團氏がこのように語っていた曲を敢えて編曲することには抵抗もあったが、何よりも、いかばかりか容易くなった楽譜によって、この曲を扱う場面が増えて欲しいという一念であった。

この「ぞうさん」という曲については、作曲した團氏から以下のような話も伺った。

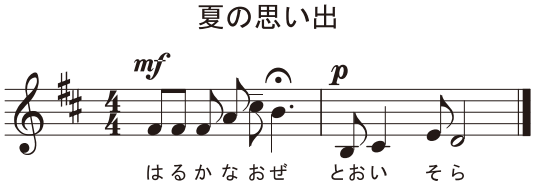
「子どもに『ぞうさん』を歌ってもらうと『さん』の箇所が短くなり、そのことによって、象の大きな身体

が表現できていない。」とのことである。楽譜の6と7を比べて欲しい。子どもが歌うと、ともすると楽譜6のように、「ぞうさん」の「さん」の箇所を短く歌いがちである。楽譜7のように、始めの2小節は、レガート記号に着目し、歌詞「ぞ」の音から「うさん」に続く箇所は、下方に緩やかに伸びる記号が「ぞうさん」の鼻をイメージさせ、象の重量感やゆったりとした様子を想像しながら歌って欲しいとのことだった。つまり、楽譜の通り歌うことである。團氏は、「演奏する側が注意して歌って欲しい。子どもに理屈を押し付けないように。演奏する方、範唱する方が正しく楽譜を読み取り歌って欲しい。」と何度も仰っていた。小さなことかもしれないが、それ以降、楽譜の読み取り方が大きく変わった瞬間でもあった。

楽譜8



楽譜9



誰でも知っている「夏の思い出」作詞:江間章子、作曲:中田喜直の楽譜の一部、最後の2小節を示した。楽譜8が、現在、歌われている楽譜である。曲全体が8分音符中心の曲で、8分音符に終始した形になっている。ところが、当初は楽譜9として発表された。現在も『日本名歌110曲集』(全音楽譜出版社、1966年)には、楽譜9にて掲載されている。後日、中田氏は、4分音符を混ぜることで、『「遠い空」の部分で遥か遠く』を表現したかったと仰っておられた。実際に、初めは楽譜9として、1949年、昭和24年「ラジオ歌謡」で発表された。それが瞬く間に全国に知れ渡り、学校やコンクールなどで歌われるようになった。当時は、コピーや印刷技術も今のようではなく、歌い手は挙って耳で覚え、繰り返し歌い、そして歌い継がれた。そして今では、中田氏公認のうえで、楽譜8のようになったのである。

今回の編曲に関してはこのようなすべてのことをもう一度振り返り、心して作業に当たることとして編曲の諸氏にも理解を得た。このように編曲者を決めるということが深くこの楽譜集に込められたのである。

加えて、子どもの生活で歌っている曲や歌って欲しい曲を集めて掲載した。「あいさつ」の歌、「朝」の歌、「お昼の弁当」の歌、「1日の別れ」に歌う曲、行事「うれしいひなまつり」、「ジングルベル」など行事に際して歌われる曲、学校の「音楽」の時間で歌い慣れた、聞いたことがあるだろう曲、また、新しい曲でも、長く歌い継がれるだろうと思える曲として「にじ」、「にんげんていいな」など。そしてこれまでも、これからも歌い続けて欲しいと願う曲、「ぞうさん」や「メダカの学校」等、日本の美しい風景や日本らしい美しい旋律を取り上げた。「なぜ歌い続けて欲しいのか?」と考えると、「聴いたものはその時間を振り返させる」から。多くの人が経験し、認識していることである。また、以前に幼稚園でどのような曲が歌われていたかを調査された資料も参考の一つとした。

(3) 全体を何曲にするかの選定

これについては楽譜が良く、実際に使いやすい、持ち運びに良い、見た目が可愛らしい、などが多く出た。楽譜を大きくしたいとは出版社からの意向でそのような形になった。後からではあるが完成品を見てこの件

は納得している。楽譜は結構な重さになる。それを考慮して132曲の収録曲を、持ちやすさを考えて2巻に分けて出版することにした。これも想像の域を脱さずに決めたのだが1度に132曲を掲載する方がよいのか、分けた方が良いのかは決めかねてはいた。

最初にも書いたがまずは編曲の先生方に普段使っている曲を提出してもらった。一方ではそれより以前に関わっている幼稚園での調査を先生方の協力のもと行った。先生方から集まった曲は本当に多くその時点で200曲をゆうに超えていた。中には重なっているものもあり選定に時間をかけた。最終的に集まった中で初心者に見た目も弾きやすく、良い音になるもの、そして現場で歌われるものを選んだ。

弾きやすいこと。簡単に言えることではあるがそう簡単にはいかなかった。幾つかの楽譜を授業で見せて学生に練習させる。もう一方の楽譜をしばらくしてから渡して比べる。以上を何人かで試みたが結果は一度曲が入った後の練習はそれ以前より簡易に弾けるのでこれだけでは結論は出しにくかった。今度は一度に見せてどちらを選ぶのかを図った。そうすると以下のようなことが起こった。考えてみれば楽譜が読めないものがどうやって楽譜を選んだかを知らねばならなかった。もう一度楽譜4、5を見て欲しい。ピアノが弾けるものにとってはどちらも簡単な楽譜ではあるが、初心者は見た目つまり時間における楽譜の数によってそれらを選ぶことがわかってきた。それが上記表1で示した結果である。当たり前のようであるがこれを思い至ったのも著者が決してピアノが得意と思っていないからによると感じている。以上の経緯から作品、全体の曲数を絞った。最終的に一巻66曲を掲載決定した。ここには出版社からの全体の楽譜の厚み、持ち歩くのに容易であって欲しいとの希望も含まれた。

(4) 教本としての内容

刊行された楽譜を街の楽器店（YAMAHA銀座店や山野楽器店）に行って探してみる。そこでは、一般の楽譜とは別に「教本」として陳列されていた。「教本」、つまり教える立場のものがより学修を進めるためのもの、或いは幼児がもっとたくさんの曲を知るためのテキストとして販売されているということ。この2点においては、「楽譜」を作成したといっても、演奏家が普段用いる「楽譜」とは意味が違うのかもしれないということに、改めて気づかされた。教本として一番気をつけたことは、先にも少しあげたが、初心者でも弾けるようになること、また「音」としてできる限り「良い音」が鳴ることを願った。中田喜直、團伊玖磨氏のお二人の巨匠は揃って「作品の中で一番気をつけて創るのは子どもの作品だ」とおっしゃっていた。

さてこの「教本」の内容だが、練習の仕方や簡単な楽典についての部分に紙幅をとった。できるだけの多くの曲を載せようとすると楽典、練習の部分は僅かになるのだが、練習の仕方、楽典について掲載したことによって、鍵盤さえあれば、何とか弾けるようになっていくことの証明でもあった。実際、学生たちは練習を重ね、成果を上げている。

(5) 全体のレベルについて

全体の曲のレベルは作曲者の領域ではあるが、著者から編曲者に対し、「普段使っている、または授業で使っている曲を選曲して欲しい」と、かなり曖昧なもの、しかし「教本」として上記の課程に則ったものを提出してもらった。曲の長さについては、TV等で流れるもの等を含め、多くの曲を鑑みながら、出版社、編曲者と共に検討を進めた。

そして、「歌いやすいのか？」という意味での、「曲のレベル」についても検討を重ねた。この件に関しては子どもたちの声域にも関係が深い。子どもの声域は大人のものとは違う。しかし、子どもの声域に関して声楽的な観点から述べたものはほとんどなく、声楽家としての活動から気づいたこととして、「少しずつキーが低音に向かっている」と言える。そこで、掲載曲は、単純に簡易にしたのではなく、実際に子どもたちが歌う場合を想定しながら移調を行い、例えば、ニ長調（シャープが2つ）からハ長調（長2度低く調性記号はない）に編曲するなど、全体の調性に工夫を凝らし、あくまでもオリジナルの調性にこだわって掲載した。

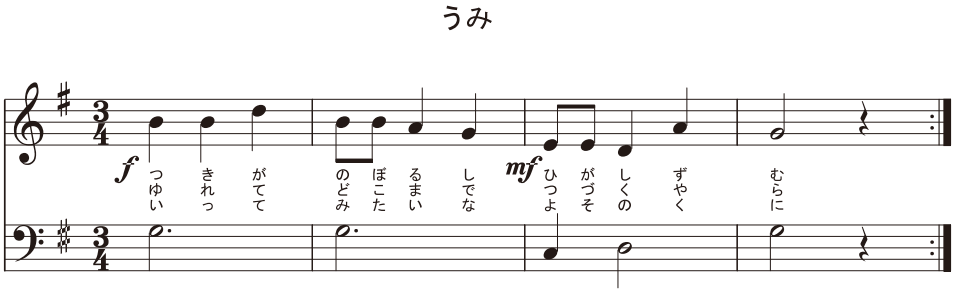
ただし、こうした一方で、調性記号が多くなると初心者が弾きづらくなることも考慮しなければならなかった。

また、楽譜には、伴奏者のためのワンポイント解説と曲のレベルを星印で示した。教育現場の先生方や学生が、解説を確認してから伴奏する曲を決めている場面を見かけることも少なくない。学生やユーザーへの配慮ではあったが、効果的に利用されている。

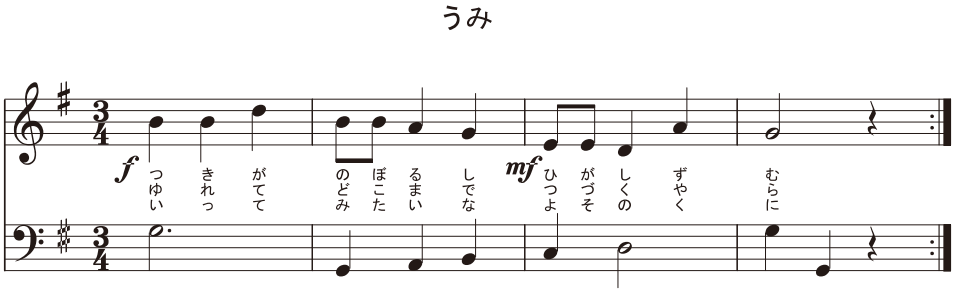
(6) 増版による改訂

2015年に初版を発行してから、教育の現場に限らず、幅広い場面、多くの方に受け入れられ、活用されてきたことで、第2版を増刷することになった。そこで、この機会に、掲載楽譜の一部改訂を行った。

楽譜10

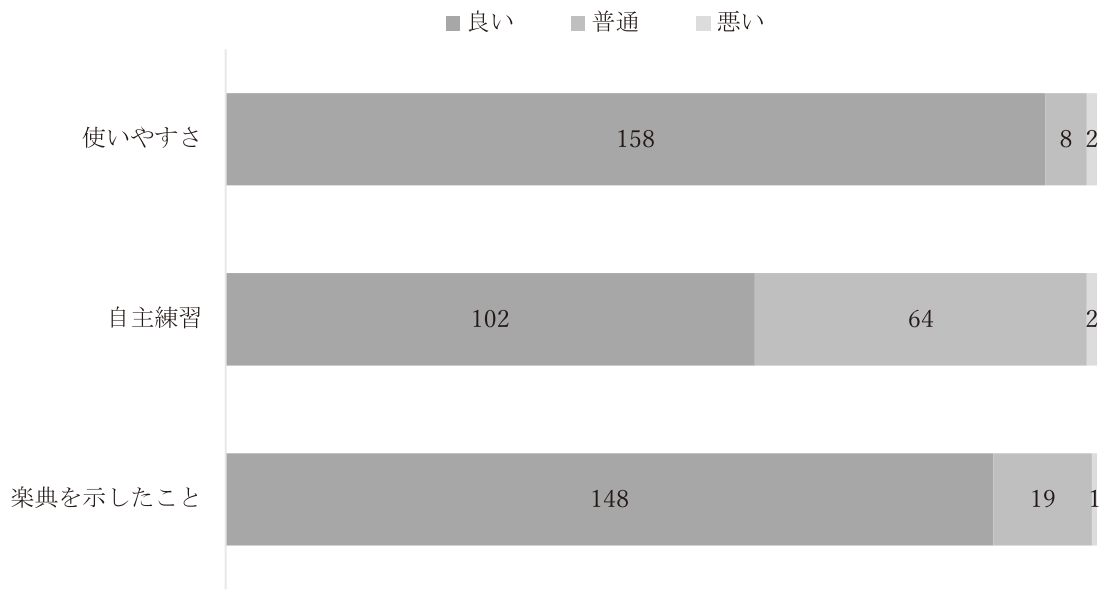


楽譜11



上記、楽譜10は初版の「うみ」と楽譜11は第2版の「うみ」の楽譜である。楽譜10は、左手にコードの根音を示した。楽譜11は左手の音に動きをつけた。これは、一見、違う音を弾いていくので初心者には難しそうに見えるが、練習していくうちに難度は解決され、この歌によく合っていることに気づく。左手で「波の音と動き」を表現している。小さな変更ではあるが、「簡単であるというだけでなく、弾きやすく子どもと歌うときに楽しいものを」という、当初からの制作の意図がここでも繰り返され、表現することが出来た。

また理論や使い方等についても、出来るだけ分かりやすく、敢えて紙幅をとって載せた。掲載曲数を増やすよりも、理論や使い方を知って、多くの場面で、たくさん弾かれる曲を掲載したかったからである。理由は、下記のアンケート（抜粋）からも明らかである。アンケートは、学生、編曲者たちの生徒、幼稚園・保育園の先生方を対象に、2016年～2018年に、初版本について行った。①使いやすさ　②自主練習について　③楽譜に楽典内容を提示したこと　以上3項目につき、「良い、普通、悪い」の3択方式と選択理由（自由記述）欄を設けて行った（有効サンプリング数168件）。



グラフ１　『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏』についてのアンケート結果

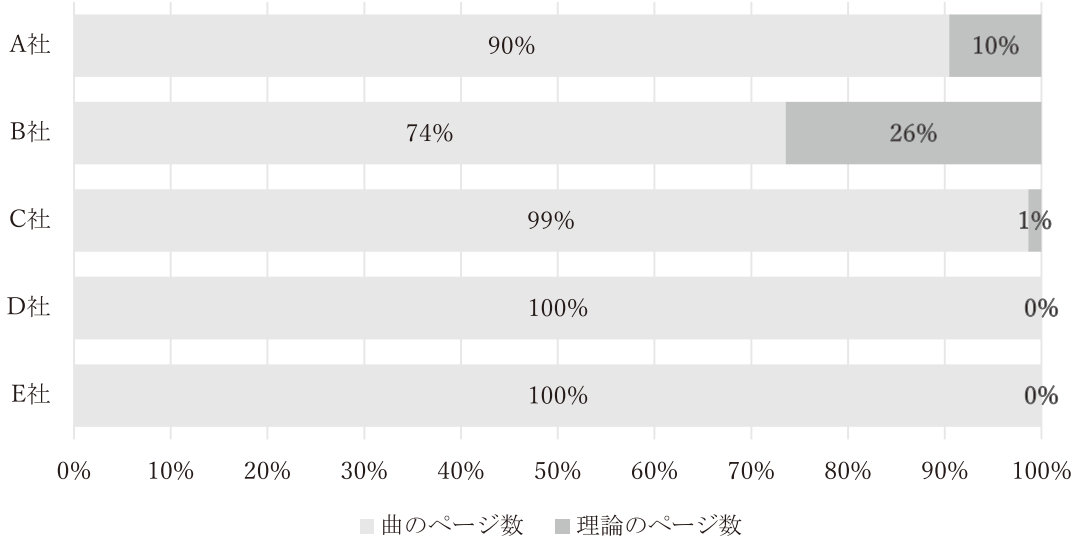
まず①「使いやすさ」について、9割が「使いやすい」と回答した。理由は、「楽譜が大きくて良い」、「練習方法まで示されている」など、著者の制作意向が反映されている。一方では、「楽譜が大き過ぎる」、「全体的に簡単過ぎる」との意見もあった。上級者らしい方の意見と考えられ、こうした読者を考慮して、「コードを自分で理解し、自由な伴奏を考えるよう」解説を加えている。

②「自主練習について」は、6割が「練習しやすい」と回答した。特に、先に述べた片手ずつの練習について高い評価をいただいた。教育の現場では、一人で練習する時と違い、楽器に正対し、良い姿勢で弾くなどということはまず考えられず、ひたすら子どもの動きを見ながら、片手で弾くことが多いのだという。そこで、テンポとハーモニーを融和させるために、左手で弾くことを大事にしている、とのことを聞いた。ここでも楽譜作成における狙い通りであった。

③「楽典を示したこと」については、9割弱が好意的な回答をした。「楽譜が見やすい」、「デザインが可愛い」に加えて、「コードを示していることにより、自分で伴奏を考えることができる」との意見であった。コードの提示は、上級者のためのものであったが、慣れない者でも、コードの根音のみを左手で演奏するなど、楽譜の一部を自分で変えて弾く者もいた。本来、楽譜がある場合は、それを読み取り、再現する（演奏する）ことが重要である。しかし、これらの伴奏曲を演奏する場面では、初心者が左手を簡単にすることによって、つっかからないのであればそれに越したことはない。上級者のためにと示したコードではあったが、有効に活用されている様子を垣間見ることができた。

3. まとめ

下記に他社の楽譜における「曲の掲載ページ数と理論ページ数」ついての比較を示す。



グラフ2　発行会社別　曲の掲載ページ数と理論ページ数の比較（2018年調べ）

注）1社で複数の楽譜を発行しているものは、それらを纏めて、総数を比較した

各社とも、ほとんどのページを楽譜の掲載に割いている。D,E社のように理論ページが無い本もある。今回、最も確認したかったことは、「理論のページ」の有無である。音楽をする者にとって「理論と実践」は両輪である。「実践」できなければ音楽とは言えないが、「理論」の後ろ盾なく、教育の現場に出て行くのはどうしたものか。ピアノが上級者であっても、ついうっかり、或いは全く知らずに演奏を続けてきている者も多く、「理論と実践」の有用性については忘れられがちである。「実践」＝音楽とは楽譜を基に行われるのであるから、ほとんど出版社が楽譜を刊行することを目的としていることがわかった。理論はいらないという判断だろうか。曲数を多く載せて、楽譜として曲を紹介することは良いことである。

上記のグラフ2のA社は本巻である。本巻は、副題として「実習生･保育者･教員おたすけ楽譜集」とした。教育の現場において、本巻を基に歌って欲しいことが刊行の目的ではあるが、楽典・理論の部分も最低限ではあるが掲載し、理論の理解を促した。

理論を26%掲載しているB社は『幼児のための音楽教育（神原雅之 他著/教育芸術社出版）』である。幼稚園教育要領、保育所保育指針等も掲載した「教本」でもある。月毎に5～10曲を配し、選曲には教育現場の先生方の意見も取り入れ楽譜も95曲が掲載されている一方、イメージサウンドや日本の子どもの歌の歴史（エミール・ジャック＝ダルクローズ、カール・オルフ、ゾルターン・コダーイ、ジョン・ペインター、鈴木鎮一らの子どもの音楽に関わった先達を紹介）等にもページを割いている。これからも、参考にすることがいたるところにある。「初心者が躊躇なく練習できる楽譜」そして、初心者も上級者も「良い音」を実践でき、鍵盤も良く弾けてゆくことを目指していけることが大事である。曲数の多い本、楽典や指導に関わる事柄が多い本、いろいろな形式があるが、いずれも教育の現場では、「子どもたちの歌」の実践に貢献しているのである。

本巻は、鍵盤に対して、多くのコンプレックスを抱いていた者が自主的にこの楽譜を理解することで十分に弾くことができるようになる。楽譜は簡単ながらも「良い音」が鳴るように工夫されている。現在、玉川大学では、本巻を使用して幼稚園教諭、保育士養成課程の「音楽」の授業を行っている。ピアノ初心者の学生も数か月で数曲以上、両手で弾けるようになる楽譜集である。本楽譜集が、教育現場はもちろんのこと、幼稚園教諭、保育士養成課程の学生にとって有益なものであると確信している。

【参考文献】

文部科学省（2018）『幼稚園教育要領』フレーベル館
厚生労働省（2018）『保育所保育指針』フレーベル館
中村　明（1974）「文体の性格をめぐって」『表現研究』20、表現学会
江本リナ（2000）「自己効力感の概念分析」『日本看護科学会誌』20（2）pp. 39–45
日野原重明・湯川れい子（2004）『音楽力』海竜社
戸井武司（2004）『トコトンやさしい音の本（今日からモノ知りシリーズ）』日刊工業新聞社
園部三郎（1975）『下手でもいい、音楽の好きな子どもを』音楽之友社
團伊玖磨（2018）『日本の音楽家を知るシリーズ「團伊玖磨」』ヤマハミュージックメディア
中田喜直（1986）『だれでも弾けるやさしい伴奏』音楽之友社
池辺晋一郎（2019）『音楽ってなんだろう』平凡社
足羽章（1984）『日本童謡唱歌全集』ドレミ楽譜出版社
神原雅之・鈴木恵津子編著（2010）『幼児のための音楽教育』教育芸術社
梅沢一彦編（2015）『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏―実習生・保育者・教員おたすけ楽譜集』ケイ・エム・ピー

日本音楽著作権協会（出）許諾2105736–101